

十月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

在る故に生きる

仲 宗 角 三 重

たぎつ瀬にしだるる枝にのぼり鮎待てる川蟬日のくるるとき
在る故に生きあるだけとおもふ時点る村の灯一つまた一つ
「紀和町史」上・下二巻をさまよひて郷土間島の姓を見付けぬ
菜^{くみ}莢の実のあかきをとりにて静かなるおもひよせ来し少女ありしが
なにごとをするにももう時間がないけふは花水木の白を見てゐる

よりしろ

古 屋 祥 子 群 馬

暑を遣らふよきお湿りや積りたる檜の落葉も土に還らむ
檜の葉を滴れる雨 草の葉を震はせる雨 雨は地に沁む

雫する素馨の下に翹たたみ草葉に似たる蝶は止まりぬ
依代を感知したるか朝顔の蔓おのづから螺旋を伸ばす
車行く青田の道にツツ、チョンと遊ぶ鶴鴒轢かれはせぬか

ジャスティス

桑 原 正 紀 東 京

大リーグ、高校野球、プロ野球ひと日観てゐて飽くことのない
力と力、若さと若さ、技と技おなじ野球なれどそれぞれに味
技、力、若さ兼ね持つ大谷にアナハイムの空の青さが似合ふ
「ビッグフライ！ オオタニサー」青空を飛ぶ白球をカメラが追へり
ルールといふたつた一つの正義ジャスティスがスポーツをこんなに正大にする

自祝

田 宮 朋 子 新 潟

臥所にてかすかに聞きし郭公のこゑ窓をあげ戸をあげて聞く
梅雨湿る朝の空のかなたより天降りきたりぬ郭公のこゑ
ひとりでは踏み入りがたき夜の山蛩を見んと人につらなる
天霧らふ峠の路にうすべにの合歡の刷毛花ねむさうに咲く
大和屋の上生菓子（天の川）抹茶をたてて古稀（じしゅう）を自祝す

☆

☆



水島晴子 兵庫

視野こめて降る雨の糸見てあれば色なき水が胸に満ちくる
あてどなき旅の心地よ閃々と風景移る画面に向きて
管理するひと病む日々を雑草はくるしきまでに芝生おほへる
梅雨ぐもを負ひて揺らげる枝先にはなびら白しひと木さるすべり
ひとにぎり小米撒きたるさまと見ゆ百日白は花散らしをり

杜沢光一郎 埼玉

老残の独りとなりしが僧侶われ檀家が死ねば葬儀もせねば
釈迦の死は入滅といひ僧侶の死は入寂といふなり何がな寂しい
脱皮しようとしてしそこなひ脱げきらず窒息死する蛇はをらずや
ひとつ眼のものは殆どまれにして何ゆゑ生き物は眼をふたつ持つ
妻に逝かれて渴きがちなる胸中を到来物の大吟醸に湿らせて寝る

武田弘之 神奈川

ゴールデンウィーク終へてやうやくに老いの出番と街行くわれは
行き帰る勤めのひまに歌を詠み三十八年樂しかりけり
いふならば夜討ち朝駆け勤めにしわれを支へて歌はありたり
平和呆け、政治離れを露呈せり令和初めの参院選は
月面に人立ちしより五十年経たる今宵の月をし仰ぐ

高野公彦 千葉

やまない雨はないし明けない夜もない また終らない生もないこと
暁の雨ひそけき音すあと何年ばくは娑婆塞ぎするのだらうか
ただ一人では生きがたいにんげんが老後一人で生きゆく多し
沢蟹は寿命何年 さはがにの素揚げを食べてわれの生き継ぐ
娑婆の字はどちらをもみな住みてをりその姿、こゑ恋しきものを

奥村晃 作* 東京

カナメモチに取つて代わりし外来のレッドロビン(カナメガキ)ぞこれ
背伸びしてワレもワレもと我を見るノースポールは冬のシロバナ
花壇にはノースポールが繁殖しポピー、カタバミあちこちに増え
シロツメクサの原に降り来て蜜吸えるアオスジアゲハの羽は大きい
地中深く育つ筍を掘り出して箱詰めにして送り賜いき

森重香代子 山口

実のつきし山椒一枝娘は提げ来昭和のままの古き庭より
還暦となりし娘といふ這ひ這ひをしてをりし日の目に頭つものを
五位鷲が屋根瓦踏みあゆみぬし記憶が不意によみがへりたり
項垂れし頭上を一羽啼いてゆく山の鴉の羽おと鋭し
六十年歌詠むことを止めざりし尊さおもひ晩年を生く

日影康子 富山

県境の家ごとに紅き花石榴咲きゐて百首会のことろ躍りき
癌に逝きし妻はあなたと同じ年と時折言ひましきその君も逝く
通り雨にどつぷり濡れしバス停のベンチに点々と椰の花散る
少女の日出会ひし風の又三郎どつどどどどどどどどどどどどどどど
あと幾何お世話できるやとわが言へばほんにさうだね夫の素直さ



影山 一男 千葉

花水木あぢさゐ過ぎて木槿咲く道の奥には光る川あり
井の頭の泉は涸るることなく前衛はやがて後衛となる
九段下駅の上りの階段をけふの怒りをしづめてのぼる
ゲームするツイッターみる漫画読むスマホに遅れ時代に遅る
麦藁帽大きく回り飛べる先夏雲ひとつ湧きあがりたり

狩野 一男 東京

七変化あぢさゐの花咲き疲れしたやうに見ゆ七月七日
あぢさゐの後継としてさるすべりもう咲き支度始めてゐるよ
街路樹の百日紅のくれなるの金を見あげぬ選挙ちかしも
選挙棄権せぬが今夏はバトルしに行かねばならぬ年金事務所
盛夏をし招くがごとくしろじろと花揺らしをり白さるすべり

宮里 信輝 神奈川

今日のみのひと日を始め五十一^{げを}言素を「あ」から「ん」まで唱へて
設計^D図^N通りに百十三元素あつまりしばしの「現象」われは
おほいなる原子炉なれど太陽^{かみさま}は放射能出さない「核融合炉」
放射能などは出さない「核融合炉」の星めぐり七十回目
五七五七七音を置きてゆく「あ」から「ん」までのなかよりえらび

岡崎 康行 新潟

傷あれど線うすれれど古けれどほどよく厚き碁盤いたたく
持ちゐても仕方がないと言はれたるその言葉人を介して聞きぬ
子ら遠く孫なき家の空き室に古き碁盤のいちめんを置く
はずの葉が風にたゆたひ遊べるはひかり押し合ふさまを伴ふ
ふきの葉が風に反るときはつなつのひかり流れて地へ届きたり

小島 ゆかり 東京

七月の空に見ひらく眼ありジオラマの街でバス待つわたし
あぢさゐのざわざわゆれて午後四時のバスより先に通り雨くる
雨の日は雨のほひの 風の日は風のほひの 聖かたつむり
言ひかけて忘れてしまひたるしばし紫陽花^だの頭しづけし
ごりごりと珈琲豆を挽く朝コロッセウムに降る雨おもふ

木畑 紀子 京都

六月の夜明けは早し朝の餌を探す山鳩のこゑにめざめぬ
梅雨に咲く桔梗はつはなむらさきの濃きは宿根のちからとおもふ
二株の葉牡丹の葉をたべつくし青虫五匹どこへ消えたか
ジガバチがいまし青虫食ふところ目撃したり生殺与奪
浜木綿のみどり葉の弧にぶらさがり難を避けをり十日目の蛹

島田 暉 神奈川

つつがなく庭の草取りしたる日の心うるほす大き白薔薇
丹精を込めて育てし白き薔薇力のかぎり夜も匂へり
薔薇園に憩ふひまなく夕立の太き白糸追ひかけてくる
水替へてしばし目高を目で追へりやがて目高にわれ変身す
みづからの無智を知るにもそれなりの^{よほひ}齢要るなり蚯蚓鳴き出づ

大松 達 知* 東京

ここでも言う所したらそこをそう言われあなるだろう。自分かわい腹癒せでなくて報復でもなくてこれなんだろうあれなんだろう寒いからではなく若くないからで、湯呑みの白湯をチエイサーにする揺れていないカーテンがああ揺れている南の円錐コノスルという酒が終わればねばならぬ世代の母とそれもあり世代の母と、世代で逃げる

津 金 規 雄 神奈川

独り聴くへエウリディーチェを失いて死を越えてなほ止まぬ愛あり悪霊の怒り鎮めてオルフェオの歌つづきをり 歌は慰藉コンソエイト安らかな死より目覚めてふたびの生の苦患に墮ちゆく妻よ人慕ふ思ひ湧きくる春の夜 もの言ふ瞳、語らぬくちびるわがフリマウエーラ春の女神エーラよいづこ ひそやかに真水の舌が渚に触れる

小 山 富紀子 京都

色々なもの出でくれど探しある手帳出でこず三日目も雨梅雨じめる廊下の奥の電話鳴り最後の叔母が病むとの知らせいつもぬしヨーウインドーに飾られてミケの遺影が通り見てゐる和歌山も雨傘マークが開いてる晴耕雨読の友へ電話を化粧品売場のほひ肩でわけ今日は女になれないわたし



清水 正 子 神奈川

三十年わが辺にありて物言はぬ鉢のバキラをけふ植ゑかへるバキラああ鉢より抜けば太き根がとぐる巻きゐつ白蛇のごとく植ゑかへをやうやく終へて剪定す男前の木になつたよバキラわがバキラ実生ならねば花咲かず傍流の生を黙々と生くながらへてバキラと共に見届けむはやぶさのサンブルリターンを

小 嶋 一 郎 佐賀

迂闊にも梅干しの種吞み込みて三日を経たり何ごともなく生け垣の向かうに消えし紋白は死にたることにして涼しけれポストまで歩む一キロ数ふれば十三人がわれを追ひ越す仰臥して両手を胸に載せたりす通夜より戻り為すことなく父の日に嫁が届けし薩摩産焼酎は渋谷の店からのもの

後 藤 美 子 北海道

記憶、思考しばば過去へ戻りゆくクレマチス夕光にはらりと崩れ処分せむ古きコスモスに挟みありゆみかたいめいけんのお手元袋「努めたい」「最善かな」と言ひ切らず逃げ腰多し頭下げつつ灯を消してしばし眼裏に残像あり遠く救急車のサイレン聞こゆ十年後までにはと言はるる新幹線見ず乗らぬわれならむなるべし

福 士 り か 青森

白桃しろももをそしてウナギをうまさうに食べる茂吉を思ふ七月梅雨明けの宣言されてこの年も折り返したり 冬がまた来る雪代の日ごとに消えて七月は緑をいちめんの木と水と空この宵は翡翠なすびをよく冷やし白磁の皿に盛りて涼まむ「シツク酒冷エテヲリマス」真夏日のけふサカサカと働きにけり



藤野 早苗 福岡

つつがなく何ごともなくまたひとつ加齢し終へし七月四日
老いらくの恋せぬやうに夏ごろも衣紋は浅く抜くを旨とす
家刀自の領分として長襦袢の繰り越し七分はきつちり守る
猛暑日の肌にすずしき越^しの布七日を雪の原に晒して
鉛筆の芯折らぬやう書き進む「精神分析批評」のカオス

風間 博夫 千葉

題は「散る」チルチルミチル不可にして「散らず散りたり散れば」と詠まむ
戸定郎の皇子の歌碑に「散る」刻む歌あり「ちる、散り、散らす」もありぬ
花が散る、気が散る、墨が散るといへあつてはならず「戦^{いくさ}に散る」は
「みたいてみれば文明開化の音がする」聞きたしごんぎり頭の音を
胸元の開けたるひとをなよなよとしたるすがたにゑがきし夢二

田中 愛子 埼玉

音量を下げて目を閉づフェデラーに錦織圭が負けさうな真夜
取り寄せの桃が届きてしばらくを分限者のごとく台所^{だいどころ}に坐す
母の白い日傘をさして会ひにゆく介護施設に暮らせる母に
田かはづの声聞きたしと母言へり会話がしばし途切れたるとき
安倍さんの仲間であれば穏やかに過ごせるのだらう かなかなの鳴く

橘 芳 園 新潟

僧の頃僧に嫌はれるしわれが僧辞めてよりもつと嫌はる
俳優は演技たのしと語らへど僧われ僧を演じ苦しみき
教師、僧ともに倦む日々歌を詠み歌の友らとしたしみてゐき
悩むのが歌詠みなんだ師のことば三十代よりわれをささへき
負けし人尻目にガッツポーズする男にだけはなりたくはなし

水 上 比呂美 東京

桃の実は朝焼けのいろ雲のいろ満ち潮のいろ耳たぶのいろ
おそ春のくれなるにはふ桃の花五弁の一重を思ふおぼろ夜
桃の実はまだ固からむ真乙女の柔稚乳になるまで待たむ
笛吹市一宮町の桃の実は曲眉豊頬、嫣然一笑

爺さんは桃をふたあつ婆さんはこのつ喰ひて鴉にひとつ

鈴木 竹志 愛知

満月の光に濡るる車列あり家々の灯の消されゆくころ
夕つ陽を受くるまへなる七月の木々の緑は壮年の色
椿の実つやつやみのる七月の社の庭に子らはまだ来ず
陽の射せば蟬は啼くなり梅雨明けを待ちきれぬごと蟬は啼くなり
流麗にほど遠きかな子燕のつたなく飛ぶを眺めてあれば

原 賀 環子 東京

万斛のさくらの歌を生みてきし桜の国はうたびとの国
紺色とページユのぶちのぼろぼろのクッション抱けりわが猫として
また、髪^{かみ}の細りしをいふ美容師よ 美容院とは病院に似る
レコードの針もて聴けりフランソワーズ・アルディの(へもう森へんか行かない)
夕空がうすい硝子に見えはしむ三角定規かうもりの羽根

水上 美季 東京

海豚はもう棲んではゐないパソコンで（返還金通知）作成しをり
パスワード日に何回も打つ職場 まへからこんな静かだつたか
指が慣れ（令和）と打ちたる七月よ（平成）と打つべき所さへ
ほぼホテル暮らしと言つてるこの人の主食おそらくエナジーコーラ
言葉では伝へられないことがありLINEスタンプでうめる、うめゆく
大野 英子 福岡

人の計に会ひやすき春、思ひ出す人ら増えゆく雨なきろくぐわつ
待ちのぞむ雨が降りだす七月のゆふべ聞きたり江崎昌子さんの計
たうとつに人の死は来てよみがへるふたりで買ひし浅鯛のおもさ
歌会おきのほたのときに貰ひし手書きなる「ぞ・よも」について（のプリント残る
うぶすなの沖端堀さししめす腕細かりしよ指細かりしよ
松尾 祥子 東京

黒南風はこの世巢立ちし人たちの声のせてわが耳朶を吹き過ぐ
もう少し娘でゐたく梅雨寒を食べよ歩けよスパルタ介護
政権の批判タブーとなりゆくか令和のラ行音の冷たさ
体内にマイクロチップ埋めらるる猫をり雨のやまぬ七月
便利だとそそのかすホモファーベルよ我にマイクロチップ埋めるな



第二刷

高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円（税別） 送料三〇〇円

明月記を読む

コスモス叢書第1148巻

短歌研究社

——定家の歌とともに 上下

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二―二―二五〇六

奥村晃作歌集

平成31年2月刊 一四〇〇円（税別）

送料三〇〇円

八十一の春

コスモス叢書第1150巻

（株）文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

第二刷

第34回詩歌文学館賞受賞 第17回前川佐美雄賞受賞

小島ゆかり歌集

平成30年9月刊 二六〇〇円（税別） 送料三〇〇円

六六魚

コスモス叢書第1143巻

本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二―八―二七―九一四

木畑紀子歌集

令和元年7月刊 二七〇〇円（税別） 送料三〇〇円

かなかなしぐれ

コスモス叢書第1157巻

現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一―二二―二〇